第 002号　2020 年 6 月 14 日　鈴木陸生

本棚に長く埋もれていた作品との再邂逅

今回のこの騒ぎが始まったのが、2 月でしょうか。2 月はまだ趣味の山歩きに毎週出かけていたのですが、3 月初めのびわ湖ホールのオペラの上演中止に始まり、予定していた観劇（歌舞伎や能）はすべてキャンセルとなりました。それに伴い、近所の図書館も閉館となりました。家のいくつかの本棚は、もはや満杯の状態で、近年は図書館での貸出が生命線だったのでこれにはまいってしまいました。はて、どうしようかと悩んで、もう一度本棚を眺めてみると、ある「不都合な真実」にふと目が留まりました。途中で読むのをやめ未読のままになっている英文の著作が多数本棚に鎮座していたのです。それも 500 ページ強の結構な大作が何十冊も。仕方がなく、もう一度読み始めてみると、あることに気が付いたのです。自身の英語力と理解力はたしかに成長しているという実感でしょうか。同時に、少なからぬ数の単語は依然とわからないままなのです。そう、今回はからずも気が付かされたのは、外国語の学習は、どこまで行っても終わりのないマラソンのようなものだという「残酷な真実」だったというわけです。

鈴木陸生（元金融サービス業）　　2020 年 6 月 1日